

博士論文（要約）

論文題目 師弟および修行者間における修証の相互相依的成立構造 ——『正
法眼蔵』「古鏡」巻注解

氏 名 長野 邦彦

(2) 目次

序章.....	3
第一節 問題の所在——修行者と真理との関係モデルについて	3
第二節 経典および禅仏教における「鏡」について	7
第一章 実体的「鏡」から修行連関としての「鏡」へ	12
第一節 「古鏡」は一にして同なのか——冒頭.....	12
第二節 「円鑑」と「諸仏大円鑑」との違い——伽耶舍多と僧伽難提	19
第三節 単独の悟りから他を悟らせる働きへ——六祖明鏡偈の読み替え.....	37
第四節 実体性の否定において成立する鏡——如鏡鑄像	48
第二章 修行・悟りの成立条件をめぐる問答	59
第一節 世俗の「胡漢」と仏道の「胡漢」	59
第二節 世俗世界の分節様式としての「古鏡」	70
第三節 修行・悟りの成立条件としての「古鏡」	79
第四節 一対一関係を媒介に全時空との関係へ.....	91
終章.....	99
参考文献一覧	103

(3) 本文

(5年以内に出版予定につき、インターネットによる公表を差し控える。)

(4) 参考文献一覧

【原典と現代語訳】道元関係

- 石井恭二『現代文訳 正法眼蔵2』河出書房新社、二〇〇四年
石井恭二訳注『永平広録』上中下、河出書房、二〇〇五年
石川力山他訳注『典座教訓・赴粥飯法』(講談社学術文庫)、講談社、一九九一年
大久保道舟編『道元禅師全集』上下、筑摩書房、一九六九～一九七〇年
大久保道舟編『古本校定 正法眼蔵 全』筑摩書房、一九七一年
鏡島元隆訳注『永平広録2』(原文対照現代語訳・道元禅師全集⑪)春秋社、一九九九年
大谷哲夫訳注『永平広録 上堂選』(講談社学術文庫)、講談社、二〇〇五年
大谷哲夫訳注『永平広録 頌古』(講談社学術文庫)、講談社、二〇〇七年

大谷哲夫訳注『道元「宝慶記」』（講談社学術文庫）、講談社、二〇一七年
鏡島元隆『道元禅師語録』（講談社学術文庫）、講談社、一九九〇年
河村孝道校注『道元禅師全集』第一巻、春秋社、一九九一年
寺田透訳注『道元和尚広録』上下、筑摩書房、一九九五年
寺田透、水野弥穂子『道元 上』（日本思想大系一二）岩波書店、一九七〇年
中村宗一『全訳 正法眼蔵 巻一』誠信書房、一九七五年
増谷文雄『正法眼蔵（二）』（講談社学術文庫）、講談社、二〇〇四年（『現代語訳 正法眼蔵』
角川書店、一九七三年の文庫化）
水野弥穂子校注『正法眼蔵』全四巻（岩波文庫）岩波書店、一九九〇～一九九三年
水野弥穂子訳注『正法眼蔵 3』（原文対照現代語訳・道元禅師全集③）春秋社、二〇〇六年
水野弥穂子『正法眼蔵随聞記』（ちくま文庫）、筑摩書房、一九九二年
和辻哲郎『正法眼蔵随聞記』（岩波文庫）、岩波書店、一九二九年、改版一九八二年

【原典と現代語訳】その他

池田智久『莊子 上 全訳注』（講談社学術文庫）講談社、二〇一四年（『中国の古典 5』学習
研究社、一九八三年を改稿したもの）
入矢義高訳注『臨濟録』（岩波文庫）岩波書店、一九八九年
入矢義高訳注『馬祖の語録』（禅の語録五）筑摩書房、一九八四年
入矢義高訳注『玄沙広録』上中下（禅の語録一二 a-c）筑摩書房、一九八七～一九九九年
入矢義高他訳注『碧巖録』上中下（岩波文庫）、岩波書店、一九九四年
景德伝燈録研究会編『景德伝灯録』三～五、禅文化研究所、一九九三～二〇一三年
坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上中下（岩波文庫）、岩波書店、一九六二～一九六七年、
改版一九七六年
中川孝訳注『六祖檀經』（禅の語録四）、筑摩書房、一九七六年
柳田聖山他『禅家語録』一（世界古典文学全集三六A）、筑摩書房、一九七二年
柳田聖山ほか『禅家語録Ⅱ』（世界古典文学全集三六B）、筑摩書房、一九七四年
柳田聖山、椎名宏雄編『禅学典籍叢刊』第一巻、臨川書店、一九九九年
『高麗大蔵経』第四十六巻、東國大學校、一九七六年。
原田種成訳注『貞観政要（上）』（新釈漢文大系九五）明治書院、一九七八年

【参考文献】

秋山範二『道元の研究』、岩波書店、一九三五年
東隆真『道元小辞典』、春秋社、一九八二年
有福孝岳『道元の世界』大阪書籍、一九八五年

有福孝岳『「正法眼蔵」に親しむ一道元の自然思想一』、学生社、一九九一年
有福孝岳『『正法眼蔵』の心』日本放送出版協会、一九九四年
栗谷良道「道元と空思想」（平井俊榮博士古稀記念論文集刊行会編『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』、春秋社）、二〇〇〇年
池田魯参『道元学の揺籃』大蔵出版、一九八九年
池田魯参『宝慶記 道元の入宋求法ノート』、大東出版社、二〇〇四年
石井恭二『正法眼蔵の世界』、河出書房新社、二〇一〇年
石井修道「恵听本『六祖壇経』の研究 定本の試作と敦煌本との対照」（『駒澤大学仏教学部論集』第十一号）、一九八〇年
石井修道『宋代禅宗史の研究—中国曹洞宗と道元禅』（学術叢書・禅仏教）、大東出版社、一九八七年
石井修道『道元禅の成立史的研究』大蔵出版、一九九一年
石井修道『中国禅宗史話—真字「正法眼蔵」に学ぶ』禅文化研究所、一九九七年
石井修道『正法眼蔵行持に学ぶ』禅文化研究所、二〇〇七年
石井清純「一二巻本『正法眼蔵』と『永平広録』—百丈野狐の話を中心として—」（『宗学研究』三〇号）、一九八八年
石井清純『「正法眼蔵」「現成公案」の巻の主題について』（駒澤大学佛教学部論集二八）一九九七年
石井清純「道元禅師における「古鏡」について」（平井俊榮博士古稀記念論文集刊行会編『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』、春秋社）、二〇〇〇年
石井清純「「現成公案」の意味するもの—道元禅師の思想的基盤について」（駒沢大学仏教学部論集三六）、二〇〇五年
石井清純「前後際断と有時の経歴」（印度學佛教學研究六三・二）、二〇一五年
石井清純『構築された仏教思想 道元』佼成出版社、二〇一六年
石川力山、熊本英人編『道元思想大系』全二二巻、同朋舎出版、一九九五年
井筒俊彦『意識と本質—精神的東洋を求めて』岩波書店、一九八三年（岩波文庫、一九九一年）
井筒俊彦『意識の形而上学—『大乘起信論』の哲学』（中公文庫 BIBLIO）、中央公論新社、二〇〇一年
伊藤秀憲『「正法眼蔵」に見られる祖師評価』（駒沢大学仏教学部研究紀要三七）、一九七九年
入矢義高『増補 求道と悦楽 中国の禅と詩』、岩波書店、二〇一二年
入矢義高『増補 自己と超越 禅・人・ことば』、岩波書店、二〇一二年
梅原猛、高崎直道『古仏のまねび〈道元〉』（仏教の思想一二）角川書店、一九六九年
大久保道舟『道元禅師伝の研究』（修訂増補版）、筑摩書房、一九六六年
大谷哲夫編著『『正法眼蔵』『永平広録』用語辞典』大法輪閣、二〇一二年

岡野守也『道元のコスモロジー 『正法眼蔵』の核心』、大法輪閣、二〇〇四年

小川隆『語録のことば——唐代の禅』禅文化研究所、二〇〇七年

小川隆『臨濟録』禅の語録のことばと思想』岩波書店、二〇〇八年

小川隆『「禅の語録」導読』、筑摩書房、二〇一六年

何燕生『道元と中国禅思想』、法蔵館、二〇〇〇年

鏡島元隆「道元禅師と六祖壇經」（『道元思想大系十五 思想篇第九卷——道元と經典・祖録——』同朋舎出版、一九九五年所収）

鏡島元隆『道元禅師と引用經典・語録の研究』、木耳社、一九六五年

鏡島元隆、玉城康四郎編『講座 道元』全七巻、春秋社、一九七九～一九八一年

鏡島元隆、鈴木格禅『十二巻本『正法眼蔵』の諸問題』、大蔵出版、一九九一年

春日佑芳『道元の思想—『正法眼蔵』の論理構造』（増補版）ぺりかん社、一九八二年

春日佑芳『道元とヴィトゲンシュタイン』ぺりかん社、一九八九年

春日佑芳『道元—正法眼蔵の言語ゲーム』ぺりかん社、一九九二年

春日佑芳『新釈 正法眼蔵』ぺりかん社、一九九五年

春日佑芳『新釈 永平広録』ぺりかん社、一九九八年

春日佑芳『正法眼蔵を読む』全六巻、ぺりかん社、一九九九年～二〇〇〇年

加藤宗厚『正法眼蔵要語索引』上下、理想社、一九六二～一九六三年

唐木順三『無常』（唐木順三全集七）、筑摩書房、一九六七年

河村孝道「道元禅に於ける行道の基本的性格」（宗学研究六）、一九六四年

河村孝道「道元禅に於ける行道の基本的性格（承前）」（宗学研究七）、一九六五年

河村孝道「道元禅に於ける行道の基本的性格（三）」（宗学研究八）、一九六六年

菅野覚明、宮川敬之「『眼蔵』を読む」、講談社 PR 誌『本』、二〇〇三年～二〇一三年

岸澤惟安『正法眼蔵全講』第七巻、大法輪閣、一九七二年

木村清孝『『正法眼蔵』全巻解説』佼成出版社、二〇一五年

清野宏道「道元禅師の行持道環と天台の仏身論」（印度學佛教學研究六一 - 一）、二〇一二年

倉澤幸久『道元思想の展開』、春秋社、二〇〇〇年

黒崎宏『ウィトゲンシュタインから道元へ 私説・正法眼蔵』、哲学書房、二〇〇三年

古賀英彦編『禅語辞典』思文閣出版、一九九一年

駒澤大学禅宗史研究会編『慧能研究——慧能の伝記と資料に関する基礎的研究——』大修館書店、一九七八年

佐藤正英「現成公按のはじめの二節をめぐって—注解の試み—」（実存主義八二）、一九七七年

正法眼蔵註解全書刊行会編『正法眼蔵註解全書』第二巻、一九五六年

鈴木哲雄『雪峰』（唐代の禅僧 9）臨川書店、二〇〇九年

禅学大辞典編纂所『新版禅学大辞典』大修館書店、一九八五年

禅文化研究所『景德傳燈録索引』上下、一九九三年

曹洞宗宗学研究所編『道元引用語録の研究』春秋社、一九九五年
高崎直道『増補新版 仏性とは何か』法蔵館、一九九七年
高島元洋『「正法眼蔵＝画餅」存在との親密な関係について』（『現代思想』総特集日本人の心の歴史、一九八二年、一七八～一八九頁）
高島元洋「日本思想の可能性について——倫理学と倫理思想史」（お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ：平成一七年度活動報告書～シンポジウム編～Ⅱ．哲学・倫理・宗教思想—日本とフランス：交差する視点—、二〇〇六年）
高島元洋「道元の仏性論」（神田外語大学日本研究所紀要四）、二〇〇九年
田上太秀・石井修道編『禅の思想辞典』東京書籍、二〇〇八年
竹村牧男『『正法眼蔵』講義—現成公案・摩訶般若波羅蜜』、大法輪閣、二〇〇五年
竹村牧男『『正法眼蔵』講義—仏性』上下、大法輪閣、二〇〇七年
竹村牧男『禅の思想を知る事典』東京堂出版、二〇一四年
田中晃『正法眼蔵の哲学』、法蔵館、一九八二年
田中晃『道元禅の世界』山喜房佛書林、一九八九年
田中晃『道元禅の世界 第二巻』山喜房佛書林、一九九四年
田中良昭『慧能 禅宗六祖像の形成と変容』臨川書店、二〇〇七年
玉城康四郎『道元』上下、春秋社、一九九六年
辻口雄一郎『正法眼蔵の思想的研究』北樹出版、二〇一二年
角田泰隆『道元禅師の思想的研究』春秋社、二〇一五年
寺田透『道元の言語宇宙』、岩波書店、一九七四年
寺田透『正法眼蔵を読む』（新装版）、法蔵館、一九九七年
土井虎賀壽『華嚴の事々無礙と三界唯心』（南都佛教七）、一九五九年
中尾良信編『孤高の禅師 道元』（日本の名僧9）、吉川弘文館、二〇〇三年
中世古祥道『道元禅師伝研究 正』、国書刊行会、一九七九年
中世古祥道『道元禅師伝研究 続』、国書刊行会、一九九七年
中世古祥道『道元禅師伝研究 新』、国書刊行会、二〇〇二年
中村宗一『正法眼蔵用語辞典』誠信書房、一九七五年
長野邦彦「道元における道得について」（倫理学紀要二六）二〇一九年
奈良康明『道元の世界 現代に問いかける禅』、日本放送出版協会、二〇〇一年
奈良康明、東隆眞『道元の二十世紀』、東京書籍、二〇〇一年
西有穆山『正法眼蔵啓迪 中巻』大法輪閣、一九六五年
西村道一『日本人の知』ベリかん社、二〇〇一年
南直哉『「正法眼蔵」を読む——存在するとはどういうことか』講談社、二〇〇八年
古田紹欽『古田紹欽著作集 第四巻』講談社、一九八一年
古田紹欽・田中良昭『慧能』大蔵出版、一九八二年
増永靈鳳『仏教における時間論 道元禅師の時間論・正法眼蔵有時の巻研究』、山喜房佛書

林、一九六六年

水野弥穂子「十二卷『正法眼蔵』の世界」、大法輪閣、一九九四年

水野弥穂子『「正法眼蔵」を読む人のために』、大法輪閣、二〇〇〇年

宮川敬之「変容する道元」講談社 PR 誌『本』、二〇一三年

森章司編『仏教比喻例話辞典』東京堂出版、一九八七年

森本和夫『正法眼蔵読解 3』ちくま学芸文庫、二〇〇四年

柳田聖山「道元と臨済」(理想五一三)、一九七六年

柳田聖山「道元と中国仏教」(禅文化研究所紀要一三)、一九八四年

頼住光子「正法眼蔵「全機」巻注解」(比較思想八)、一九八九年

頼住光子「道元の世界認識に関する一考察—『正法眼蔵』「山水経」等をてがかりとして」
(倫理学紀要六)、一九九〇年

頼住光子「道元における善と悪—『正法眼蔵』「諸悪莫作」巻の註解のころみ」(『山口
大学哲学研究』三)、一九九四年

頼住光子「道元の生死観—生死即涅槃・住法位・三世の因果」(竹内整一、菅野覚明『季
刊日本思想史』六二、ペリかん社)、二〇〇二年

頼住光子「道元における確実なる世界について—『正法眼蔵』「一顆明珠」巻を手がかり
として」(人文科学紀要五六)、二〇〇三年

頼住光子『道元 自己・時間・世界はどのように成立するのか』日本放送出版協会、二〇〇
五年

頼住光子『日本仏教思想—原文で読む仏教入門』、北樹出版、二〇一〇年

頼住光子『道元の世界 大乘仏教の真髄を読み解く』NHK 出版、二〇一一年

頼住光子『正法眼蔵入門』(角川ソフィア文庫)、角川書店、二〇一四年

頼住光子『「正法眼蔵」「摩訶般若波羅蜜」巻に関する一考察」(駒澤大学仏教学部論集四六)、
二〇一五年

頼住光子「道元における「さとり」の世界とその表現：『正法眼蔵』「梅華」巻註解の試み」
(倫理学紀要二五)、二〇一七年

和辻哲郎『日本精神史研究』(岩波文庫) 岩波書店、一九九二年

(5) 論文の内容の要旨

論文題目 師弟および修行者間における修証の相互相依的成立構造
—『正法眼蔵』「古鏡」巻注解

氏 名 長野 邦彦

本論文は、『正法眼蔵』「古鏡」巻の注解を通じて、修行者間において修行・悟りが相互相

依的に成立している構造を考察するものである。そして、そうした相互相依的な修行・悟りの実現に際しては、単に一人の修行者と全時空とが直接的・無媒介的にかかわるのではなく、むしろ師弟関係をはじめとする修行者同士の対一関係こそが中核的な契機となっていることを示し、さらに、修行には祖師たちの道得（真理の言語的表現）も含まれ、したがって道得同士が相互相依的にぶつかり合う「古鏡」巻というテキストそのものにおいて、前述の修行・悟りの相互相依性の実現していることを明らかにしていく。

序章では、まず、従来の『眼蔵』研究において、「差別・無差別」図式および「個人対真理」というモデルが解釈の前提とされ、師弟関係をはじめとする修行者同士の相互性が見過ごされがちであったことを確認する（第一節）。次に、経典および禅仏教における「鏡」観について、「古鏡」巻を読解していくにあたり必要となる範囲で瞥見する。伝統的な「鏡」イメージ、特に「古鏡」のそれは、相対的な差別相を超えた絶対的な無差別の根源といった意味で用いられることが多く、「差別・無差別」図式で捉えやすい一面を持つため、「古鏡」巻もこうした前提のもとに読まれることが多いが、本稿はテキストを注解的に読むことで、そうした図式では捉えきれない道元の思考を明らかにすることを目指す。（第二節）

第一章では、他の存在から独立した実体的な「鏡」イメージが否定され、師弟関係において修行・悟りが相互相依的に成立する運動それ自体が「鏡」であるとして、道元が公案を読み替え、解釈していくさまを確認する。

まず、「古鏡」冒頭について、解釈に際して無造作に「差別・無差別」図式を当てはめて、「古鏡」の同一性を強調しすぎる従来の読みを揺さぶり、むしろこの箇所で使用される「同」という辞には、同一性というより、自他の修行・悟りが互いに互いの成立条件になっているという意味での同時性こそが表現されている可能性があることを論じる。また、この冒頭の一段について道元が念頭に置いているのは、さしあたり一と多とが無媒介に相即するような事柄ではなく、師弟関係に代表される修行者同士の対一関係にかかわる事態であると読みうる余地が十分にあり、したがって続く「古鏡」巻全体もまた、「差別・無差別」図式のみでは解釈しきれない可能性があることを提示する。（第一節）。

次に、伽耶舎多の因縁について検討する。伽耶舎多の誕生と同時にやって来た円鑑の正体は、一切の仏祖たちの修行・悟りが相互相依的に成立させ合っている運動そのもの（修行連関）であり、一切の分節化を超越している。だが、伽耶舎多の円鑑は村落共同体の分節様式によって半ば実体化されているため、そこからは修行連関を部分的に垣間見ることしかできない。このような不完全な状態は、僧伽難提と出会い、「有何所表」という問を突き付けられたことを機に一変する。この問は「円鑑」の正体を問うものであり、伽耶舎多は「諸仏大円鑑」で始まる偈によって答えた。それは「円鑑」の正体が自らの修行・悟りをも含む修行連関であることを表現し、さらにその修行連関を、僧伽難提との相互的な問答それ自体のうちに実現するものであった。こうして「諸仏大円鑑」としての修行連関が明らかとなった結果、「円鑑」という不十分な形態は消失することになる（第二節）。

続いて、六祖慧能の明鏡偈を引く箇所について考察する。通常、単独での修行・悟りの力に優れた存在として捉えられがちな六祖慧能を、道元は、他の存在の修行・道得を引き出し、自他ともに修行・悟りを目指していく人物としていることを、先行資料との比較を通じつつ明らかにする。そして、このことと並行的に、六祖の偈の「明鏡」も、単独の悟りを象徴するものから、他の修行・悟りと相互相依的に修証する非実体的な働きそのものとして読み替えられていることを示す（第三節）。

そして、南嶽懷讓の「如鏡鑄像」の公案、およびそれに対する道元のコメントについて検討していく。南嶽懷讓とある僧の問答において、万物を生み出す根源であるような「心」の象徴としての「鏡」が批判される。それは、内容においてスタティックかつ単独の悟りを前提とするモデルであると同時に、そうした内容を表現する言説としても、他の言説から独立してそれ単独で成り立つものとなってしまう。しかし、そのような固定化を個々の修行が絶えず否定し、相互に固定化・実体化から解放し合うことによって、自他の中で修行・悟りが成り立つのであり、こうした複数の修行が相互相依的に互いを成り立たせ合う運動としての「鏡」が、まさに南嶽と僧との問答というダイナミズムにおいて実現されているのだと道元は考える。ここでは、「鑄（いつぶす）」という語に象徴される修行・悟りの相互否定的関係が強調される。（第四節）。

第二章では、雪峰と玄沙による「古鏡」「明鏡」の問答を見ていく。従来、「胡来胡現、漢来漢現」は一般的な事物事象のありのままの存在や認識にかかわるものとされてきたが、実際には師弟の出会いを表す語であることを論じ、また、道元が、世俗的に規定された胡漢と、師と出会うことで修行者となった胡漢とを区別していることを示した上で、「胡来胡現、漢来漢現」は、世俗的規定を受けた存在が師との出会いを通じて修行者として成立するという事態を表していることを明らかにする（第一節）。

次に、世俗世界の「鏡」について言及されている箇所について考察する。これまで、この箇所の「鏡」も真理を表すものの一つとして、仏法の「古鏡」と同一水準で捉えられてきた。だが、本文を精査し、これはあくまで、ある世俗世界をそれとして成り立たせる分節様式であり、そのような分節化を逸脱している仏法の「古鏡」とは水準が異なるものであることを論じる。この、ある世俗世界の分節様式は、その世界の内部で暮らすものにとっての思考や行動の可能性の条件となるものであるから、原理的にその分節様式そのものの外部に触れることは困難とならざるをえない（第二節）。

続いて、雪峰と玄沙の問答に対する道元のコメントを検討し、この問答の「古鏡」の水準を見極めていく。世俗世界の分節様式である「古鏡」の内部に生きる者にとって、その外部を知ることが本質的に困難であったのと類比的に、修行世界における修行・悟りの先行条件である「古鏡」およびそれを体現している師の正体を見極め、それを体得し、師の法を嗣ぐことは難しい。雪峰の言う「古鏡」の狙いは、いまだ師の力に依存してしまっている弟子たちに対し、修行・悟りの条件であるところの「古鏡」の次元に気づかせていくことにある。

そして、そのような雪峰の働きかけの水準を受け止めた弟子が玄沙であった。彼は「明鏡」の間によって、隠れていた「古鏡」の正体を明らかにする。それは、全時空の修行・悟りが相互に互いの成立条件となり、修行・悟りを可能にさせ合っているという運動にほかならず、それはまさに雪峰と玄沙との問答の中において実現されている。「古鏡」と「明鏡」は互いに実体化を克服し合うことで同時に道得（真理の言語表現）として成り立っているのである（第三節）。

さらに、雪峰と玄沙との問答は進んでいき、玄沙による「百雑粹」の道得にいたる。「百雑粹」とは粉々に打ち砕くことで相手を実体化から解放する働きだが、それは対象を一方的に打ち砕いて、打ち砕く主体が実体的に存続するということではない。「百雑粹」は、雪峰と玄沙、あるいは「古鏡」と「明鏡」といった修行・道得同士が相互に「百雑粹」することではじめて真実の修行として成立するのである。二人の公案においてはまさにこうした修行・道得の相互否定的な運動が実現していたが、それは雪峰と玄沙の二人のみに限った関係ではない。師弟の一对一関係を基本としつつ、全時空の修行・悟りと連動し、相互相依的に成り立たせ合っていくものとして、道元は様々な祖師の公案と結びつけようとする。その結果、「古鏡」巻自体の記述もまた、修行連関の一つの実現となっているのである（第四節）。

最後に、第一章および第二章における「古鏡」巻注解の成果を踏まえつつ、巻後半の解釈について簡単に見通しを述べる。「看彌猴」の公案では、「彌猴」のような、通常仏教の文脈では否定的に言及されてきた言葉・シンボルであっても、仏祖は自在に真理の表現として使いこなすことができ、それによってむしろ既存の固定的な価値観の方を破壊しようということが示される。次に「似古鏡闊」の公案では、雪峰・玄沙のような仏祖たちは、仏祖同士だけで修行連関を実現しているのではなく、「火炉」のような身近な事物事象との間にも修行連関を実現していくことが主張される。また「古鏡未磨時」の公案では、「磨」の主体が「百雑粹」と同様修行連関であることが確認される。こうした文脈の中で、「磨磚」の公案は、単独の修行・悟りを問題にしているのではなく、南嶽が仲立ちとなって塙と馬祖との間に修行・悟りの相互相依的成立運動を実現させているものとして読むことができるという仮説を提示する。